

地理学への思い入れから」だという。言葉に滲む地理学への見方は手厳しい。執筆陣は従って地理学関係者に留まらず東南アジアに造詣が深い多分野の専門家41名により構成されている。このように多数の、しかも気鋭の執筆陣を組織し、それぞれの原稿を一巻に取りまとめるという作業が3名の編集者にとって如何に骨の折れる困難な仕事であったかという点は容易に想像がつく。学派を超えて英知を結集し、学問を進めようとする現代的な試みの一つとして認知され、評価されるであろう。実際、評者は本書を通読して様々なことを教えられた。本書が意図し語りかけることについて、考えてみたい。

## II 構 成

本書はこれまでの類書〔例えば、渡辺 1971〕に見られるような国単位の構成ではなく、分野やトピックという現代的な切り口で構成されている。全体は大きく前半と後半に分けられる。前半の第I部『東南アジア概説』を構成する2つの章、すなわち、第1章「モンスーンアジアの自然と生態」と第2章「文明・歴史・文化」では、所与の自然環境、存在する歴史、それらが育んだ文化を解説し、東南アジアの輪郭を描くことを試みている。解説の一例を挙げれば、4200年前と3200年前の気候の寒冷化で中国南部（長江文明）から人々がいくつかの大河に沿って移動（南下）し東南アジア各地へ至る一方、インド文明からは海の道を伝って人々が東南アジアに入り、紀元前5世紀頃には既に中国文明とインド文明が東南アジアに入っていたという（2.7節）。後半は2部5章により構成されている。第II部『モンスーンアジアの社会と人々の営み』は、第3章「稲作社会と水利」、第4章「人々の生業と農漁村」、及び第5章「都市の生態と成長」から成り、第III部『グローバル化の中の東南アジア』には、第6章「国家と社会の変容」と第7章「経済・開発と人々の営み」が含まれる。後半の2部5章では、前半の1部2章で描画された時空間の輪郭を持つ東南アジアにおいて現出した各分野の、あるいは現代の姿を描き出している。各章各節の論述を支える現地調査とそこから得られた情報の整理と分析は、入念かつ的確であり、説得力十分である。読者は特にこの後半の各章

立川武蔵・安田喜憲（監修）；春山成子・藤巻正己・野間晴雄（編）。『東南アジア』朝倉世界地理講座3——大地と人間の物語。朝倉書店、2009、451p.

## I はじめに

本書は全15巻からなる朝倉世界地理講座の第3巻であるが、このシリーズの「刊行のことば」が強烈である。本書の目指すところは「未来を生き抜くための世界地域研究」であり、「地理」という言葉を含むシリーズタイトルになったのは「出版社の強い

各節の中に、その内容がより身近であるが故に、東南アジアの姿を臉の裏に思い浮かべるであろう。こうした一次情報、一次分析こそ地域の理解を進める出発点であり、あらゆるレベルの分析・考察においてそれを可能にする不可欠の要素である。その重要性と価値は本書によって改めて示されていると言える。

### III 内容——狙いと特徴

本書全体を通じて最も注目される第一の特徴は、編集陣が「現地でのフィールド経験を通じて『東南アジア的なるもの』を探求」(まえがき)することを目指したことにありとされる。評者はこれまでも、地理学における地誌、あるいは地域研究においては、地域が有する多様性を実証的に示す方向に努力が傾注され、多様性を生みながらも通底している原理、あるいは思想、特徴といったものを探求する姿勢が乏しいと感じてきた。しかし、東南アジアについてのそうした分析考察状況の背景には、古くから東の中国文明と西のインド文明のはざまに人口が相対的に少ないことも反映してそれぞれの圧倒的な影響を受け、15世紀以降には西洋文明が断続的に流入し大きな変化も経験してきたという歴史があること(2.1節)、東南アジアという用語の使用が近代の産物でありその地域概念の歴史は比較的新しく、このことは東南アジアの自然的・生態的・地理的な一体感をもともと希薄であったと考えられること(2.1節)、東南アジアでは実際に宗教と言語が多様であり、地域統一的な国家が成立した歴史もなく地域に住む人々に共通する歴史的記憶が存在するとは思えないこと(6.2節)、などがあると解説されている。本書ではそうした背景がありながらも、あえてその原理を「東南アジア的なるもの」という表現で探求する姿勢を示していることは意義深い。例えば自然環境の面から見れば、東南アジアには雨季に豊富な水資源(1.2, 1.3, 3.4節)、長い海岸線と広い大陸棚(1.1, 1.4, 2.4, 4.6節)といった地域を特徴付ける要素があり、これら特有の自然環境に根ざした共通の生業の形(3.1, 3.3, 3.4, 3.5, 4.5節)と社会風習(3.3, 3.4, 4.6節)がある。またこうした共通の特徴を踏まえながら、自然環

境、人口、土地利用を指標として地域内を環境生態的に区分する試みも紹介されている(1.3節)。環境決定論によって通底する原理の全てを説明することは出来ないながらも、所与の自然と人々の生活・風習との関係性を分析の出発点の一つとするアプローチは現代においても意味があるように思われる。

ラオスの山地焼畑やサラワクの森林で近年起こっている変化が地域にとって持続可能なものか懸念があるように(4.1, 7.1節)、東南アジアで近年生じている様々な変化が持続可能な変化なのかどうか、持続可能な変化でないならどう対処すれば良いのか、これこそが東南アジアの今日的な課題である。本書の編者著者たちの問題意識はこの点にも注がれており、東南アジアで生起している自然資源、村落・都市社会、地域経済の変化が豊富な現地調査での知見を基に分析され、時に変化の行く末についても検討されている。この点が本書の第二の特徴である。確かに疾病・健康への対応(1.5節)、あるいは災害への対応(7.4節)のように、課題への対応を通じて持続可能性の向上が比較的明確に期待できる分野もあるが、伝統的に自然資源を生活の糧としてきた山地社会や森林社会などのように変化の行く末が不透明な分野も多い。言うまでもなくそうした不透明な変化には、金融・経済・情報・人材のグローバル化(6.2, 6.3節)や中国とインドの経済的な台頭(5.1節)、国内における工業化と都市化の進展(5.4, 5.5, 5.6節)、そうした変化に伴う政治の流動化(6.1, 6.4節)などが密接に関連しており、本書ではそうした関連を考えるための現代における基礎情報が豊富に提示されている。

### IV 論 点

そうした意義と内容を持つ本書の、そうであるが故に指摘されうるとされる論点、あるいは今後の類書における発展性を、ここでは4つ挙げることにしたい。まず、本書が「東南アジア的なるもの」の探求を目指しているながらも、その結論、つまり本書全体から見えてきた「東南アジア的なるもの」の内容をまとめ、提示する一節が設けられていないことが何とも惜まれる。但し、「まえがき」にはそのヒントと理解できる記載がある。すなわち「東南アジ

ア的なもの」とは、「インドと中国という二大文明のはざまにあることから生まれ」「アンコールに典型的に見られるように『水の帝国』ともいえる独自の文化を育み」「列強による帝国主義の時代においても海洋上の交流・交易によって支えられ続けた」、もの(何か)である。それぞれに重要な指摘であり、行間からは「そうした『東南アジア的なもの』を生んだ背景が読み取れるもの」こそ「東南アジア的なもの」であるとも読める。しかし強いて言えば、それが具体的に何なのかを総括していない。確かに各節には核心に関する個別の見解が散見される。一例を挙げれば、稲作水利共同体組織の内部規範の延長にあるモンスーンアジア農村社会や人々の価値観は、個々人の利益追求よりも地域社会の維持保全と集団内の公平性に基づいている、との見方が提示されている(3.4節)。読者はそうした叙述から自らの「東南アジア的なもの」を考えていくことは出来るだろうし、そうした特徴的な個別現象それぞれが「東南アジア的なもの」ということなのかかもしれない。しかしそうであればこそ、自らが語った本書の意図を完結させる意味からも、各節での見方を総括した結論が論じられるべきだったのではなかろうか。期待が大きかっただけに、肩透かしの読後感を禁じえない。また同時に、その「東南アジア的なもの」が現地での調査と経験のみによって見出すことができるかどうかは、そう単純ではないようにも思われる。現地の理解が原理の抽出を保障する訳ではないからである。マニラにおける都市貧困層ネットワークを分析した例(5.2節)に見られるように、既往研究での理論を組み合わせつつ、時にはその批判的な再考も含めて探求するアプローチを一層取り入れた研究の積み重ねが求められているように思われた。

第二に、内容的な特徴の2点目として挙げた「近年の東南アジアで生じている様々な変化が持続可能な変化なのかどうか」についてはいくつかの節に一定の解説があるが(3.3, 3.4, 4.1, 4.2節など)、さらに論考を進めるならば、これら解説を総括し、例えば第II部や第III部の各章単位ではどのように見通せるのか、将来予測やあるべき社会の姿の提言などにも立ち入って論じる余地もあったのではないかとと思われる。地域はそこに存在するもの、守るも

のというだけでなく、作っていくものでもある。例えば、A.ウォーカーはタイ北部の農村社会における家計経済が農村と都市(あるいは市場経済)との関係性の上で成立している現実を分析するなど[Walker 2008]、研究者の立場からタイにおける(しかしそれには東南アジアにおける一定の一般性が内包されているだろう)農村と都市の共存・共栄という社会のあり方を模索している。古代文明に端を発し永い歴史に育まれてきた文化・習慣の中に見出される「東南アジア的なもの」の根幹を理解し尊重しつつも、客観的な現状分析に基づく将来像、あるいはその発展性や危険性などを、多少の知的冒険を犯しても論じるといった、地誌・地域研究の書としての新しさにも挑むことが出来たようにも感じる。そしてこうした論考こそが、本シリーズが目指す「未来を生き抜くための世界地域研究」なのではないかと思われるのである。

第三に、先に述べた本書の編集方針の下では、トピックの選定が全体の内容に決定的な影響を与えることは言うまでもない。450ページを超える大著にこれ以上のページを重ねることは得策とは思えないが、「東南アジア的なものの探求」では、例えば東南アジアにおける「宗教」の解説は大いに役立ったのではないかと思われる。例えば、デルヴェール[1969]は大陸部東南アジアと島嶼部東南アジア(マレー半島含む)をそれぞれ仏教社会(宗教性を帯びた村落共同体)、マラヤ社会(言語が類似)と呼び、つまり特徴付けして、それぞれの地域を論述している。現在ではこれらの特徴及びその特徴に基づく区分に対しての批判があるかもしれず、そうした検討は的確に行っていくとして、「宗教と社会」は、本書が強調するところの、根源的には所与の自然環境に大きく規定される「自然資源と人間との関係」と同様に、地域の底流を流れるものの透視にはとても有効な見方であるように思われる。この点については、宗教社会学などの専門的な立場からの見解を伺いたいところである。またより細部になるが、戦後の、あるいは今後の経済社会開発を考える上では、「海外援助の果たしてきた役割とその役割の変化」に関する分析が役立ったかもしれない。

最後に、自然環境については第I部「東南アジア概説」において工夫されながら解説されているもの

の、その工夫の結果として分量は圧縮され、その重要性に比して軽く扱われているような印象を受けた。東南アジアの自然を特徴づける一つは確かに熱帯性気候であるが、もう一つは地域の一部、すなわち島嶼部東南アジアの広範な部分の変動帯に立地していることである。また、人間と社会を古代文明に遡って解説するのであれば、自然についても同様に地質時代に遡って解説されても良いだろうと思われた。第II部で大きく扱われる自然資源の利用を分析するためにも、地質、地形、土壌、気候、またそれらの産物である植生の理解は基本的な問題であり、特にアマゾンと並び「地球の肺」とされ（しかしこの見方に対しては谷 [2001] の注意喚起もある）、生物多様性の面からも極めて重要な東南アジアの森林は、地球環境の時代のキーワードであり、これまでの研究蓄積を踏まえた詳しい解説を加えることで読者の関心を惹いたであろう。加えて、海洋・海流に関する解説やエルニーニョ・南方振動に関する解説があれば、気候変動の世紀の地誌書としても相応しかったようにも思う。

## V お わ り に

本書は21世紀初頭における東南アジア地域を解説し論じたものである。東南アジアを時空間総合的に解説し論じる類書は将来においても刊行されるであろう。その時点でその類書と本書を比較して明らかになるトピックの相違や共通、あるいは各分野の

進展状況を、手法的に有効であれば他の地域の変化状況との比較も用いながら検証していくことが、取りも直さず「東南アジア的なるもの」を抽出する鍵になるのではないだろうか。既に述べた現代におけるグローバル化の中では、その影響の現われ方に「東南アジア的なるもの」が見出される可能性も高いだろう。本書が目指した「東南アジア的なるもの」の探求は今後も続いていく。その意味において、本書が提示した東南アジアに対する切り口、情報、分析は特記されるものとなるに違いない。  
(古市剛久・東京農工大学環境リーダー育成センター)

## 参考文献

- 谷 誠. 2001. 「熱帯雨林は地球の肺か」『科学』71 (1): 23-27.
- デルヴェール・ジャン. 1969. 『東南アジアの地理』 菊池一雅 (訳). 白水社 (文庫クセジュ).
- 渡辺 光 (編). 1971. 『世界地理3: 東南アジア』 朝倉書店.
- Walker, A. 2008. Royal Misinterpretation of Rural Livelihoods. *New Mandala*, January 28, 2008. Available at: <http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2008/01/28/royal-misrepresentation-of-rural-livelihoods/>